

床試験成績の概要は2009年10月22日 読売新聞に「新型インフル、成人に免疫?……過去の季節性感染で」のタイトルで報道された。岸本忠三大阪大学元学長による「過去に類似したウイルスに感染したことが影響している可能性が高い。」とのコメントと、田代真人国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センター長による「1回の接種で効果が出るのは、過去の免疫が呼び覚まされたから。今回の新型は、過去に流行した季節性の『いところ』か『はところ』なのだろう。」とのコメントが掲載された。また、このデータに対する尾身 茂 元 WHO 西太平洋事務局長の発言の要旨は以下のごとくである。健康な成人200人に対してやった研究は、ブースター効果がない、免疫記憶がない全くの新しい感染だとあり得ない結果を示した。(1) 60歳以上の人は免疫に記憶があるだけでなくプロテクションもされているだろう。それより若い人はプロテクションされないけれど記憶がある。実際に感染した人の抗体価の上がり方も新しい感染では考えられないほど早い。(2) 何らかの免疫の記憶がないとああはならないというのが、ほとんどのサイエンティストの考え方。はっきり言って誰もまだワクチンを打ったことがないのだから現場でどのように反応するかは注意が必要だが、全くの処女の感染では非常に考えにくい。たとえばH5N1では、あんな反応しない。3つのクライテリアに関して30マイクロ(筋注)だけでなく15マイクロという少量(皮下注)でもヨーロッパの基準を越した。結論は何らかの免疫の記憶があっただろう。だから、十分に免疫が上がるのだろう。」

国内産インフルエンザ A(H1N1)2009<単価ワクチン>の臨床試験で、接種前 HI 抗体陽性者(10倍以上抗体保有者)が57/194 29%であったことは表5の A/NJ 8x53/76抗体保有率の結果と一致している。また、A(H1N1)2009<単価ワクチン>接種前に比較して1回接種後に4倍以上上昇したのが、皮下接種群の80/96 83%, 30 μ g 筋肉内接種群の92/98 94%であったことに対する岸本教授、田代センター長、尾身茂教授のコメントは A(H1N1)2009が人類にはじめて登場したウイルスでないことを示唆している。人→人で流行したことがあるインフル

エンザ、過去に類似したウイルスが流布したことによって国民が免疫を持つインフルエンザは通常のインフルエンザであり、新型インフルエンザではない。

d. 欧米の研究者も新型登場の呪縛からのがれられず

2009年11月17日 「新型インフルウイルスの免疫部分、季節性と共通点多数」と報道された。Aソ連型にはT細胞が反応する抗原決定基が78個あり、このうち54個(69%)が新型インフルエンザでも見つかった。季節性と新型のウイルスが共通する部分を持つため多くの人が何らかの新型に対する免疫を持っている可能性が指摘された。原典と web site には以下のごとく記載されていた¹⁷⁻¹⁹。Immune Epitope Database のデータを使用したところ、(1)B細胞が認識するAソ連型のHAおよびNAにある抗原決定基の6個のうち1個(1/6 17%)はA(H1N1)2009にも存在する、(2)Aソ連型にはCD8⁺T細胞が認識する抗原決定基が78個あり、その69%はA(H1N1)2009にも存在する、(3)成人群はA(H1N1)2009に対するmemory T cell immunityを有しており、この免疫の程度は、季節性H1N1インフルエンザに対するmemory T cell immunityと同程度、これは過去の感染の暴露の結果である、(4)感染防御には抗体が必要なので、インフルエンザA(H1N1)2009ワクチンは感染を防ぐために必要であろう、(5)T細胞の免疫は感染症状を緩和する。T細胞のエピトープの大部分がA(H1N1)2009において保持されている。であるから、ウイルスの免疫機能の攻撃の受け易さから判断する限り、A(H1N1)2009の臨床症状の重症度は季節性インフルエンザの症状と殆どかわりはない、と述べ、A(H1N1)2009は当初おそれられていた殺人ウイルスではないのはそのためであるといっている。要するにA(H1N1)2009は新型ではなく通常のインフルエンザであると結論したということである。しかし、ラホヤ研究所(La Jolla Institute)のDr. Alessandro Setteは「この研究は、今回のパンデミックが当初予想されていたよりも深刻度が低いのかを理解する手助けになる」と語り、Dr. Bjoern Petersは「深刻度は通常の季節性インフルエンザより低い」といっている。世界中の研究者が「夢にまで見